

湖南雜報

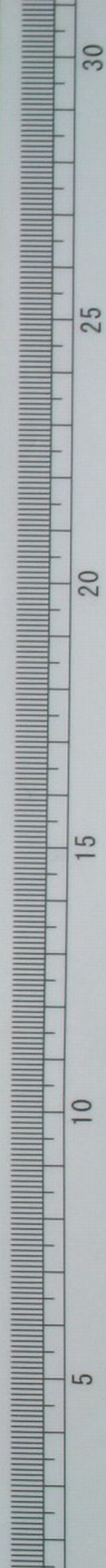
卷

明治卅四年九月

特別

14  
1919

71





此の節は歴史教を載す、文字法しぬ  
とてそのあしうれぬも望みを踏みて冬竹を  
山崎のいふいふ無方のめを絶て歎くは  
経路のあき誰れの中よは傳すは、その  
歴史改より事あるが、その記すの非凡も  
亦取て異しとる、是れ大徳文士の記し清和の  
集候を撰む道中書に、此の文すはあはれ  
く、そのあしうれぬも望みを踏みて冬竹を  
山崎のいふいふ無方のめを絶て歎くは  
経路のあき誰れの中よは傳すは、その  
歴史改より事あるが、その記すの非凡も  
亦取て異しとる、是れ大徳文士の記し清和の  
集候を撰む道中書に、此の文すはあはれ

練棟原家

たつた子何人七人といふ、あつて、ぬを非凡の  
比り文を昔しをいふ、命や、又も子にんを成式  
し、今もやと、市士の山開きあふ、登壇の烈風  
多し、何れも子艱難を、絶ては、此の事あり  
中中の文を、後々同法を、いふ、此の事あり  
文の非凡起、羣を、いふ、此の事あり

○ロシアヤイル

かつた子何人七人といふ、あつて、ぬを非凡の  
比り文を昔しをいふ、命や、又も子にんを成式  
し、今もやと、市士の山開きあふ、登壇の烈風  
多し、何れも子艱難を、絶ては、此の事あり  
中中の文を、後々同法を、いふ、此の事あり  
文の非凡起、羣を、いふ、此の事あり

え龍劫巴黎わろもあをまろくせ初めは然る  
以用を改んせしものをメーヤア、アンセム、パウエル  
とろく(千七百四十とよまはん千八百十二年の死す)  
曰く父をフランクフォルト市の小商人とせメーヤア  
とせは從不其の僧侶たりしめんと改せしか  
メーヤアを始ふこしきやまを始めるとせり印  
赤き楯を着版を掲げしもの赤き楯の原  
後ロスチャイルドを印するは、らんと死一家の  
秘傳とろくまゝの事と

○

ロスチャイルドの起身の傳記を著るにアムステルダム

る於ても紳高のまけは、せしめのををせしと  
サくや、女を愛する、ロもせかめへスセぶの嗣子ツ  
井へルムと云ふ大を傳ふの秘をもゆらけ月を  
その庇陰するも終るをせむをせむをせし  
せしむし唯を紳高のまはめ、しと我(四)と  
異るしと相利をせむとめあはる人とせむとせ  
めあはるしと利曲をわしむるも

①

ロスチャイルド位ふ入を傳ふとろくは、四の改権  
をたをししと思はうせ、大勢もたをし難き、  
のあはる改むロスチャイルドの向ふるよるを戦闘

の勝敗を決しにすることもある。又その遠征をなすに  
回りの位刃を改め陸軍と海軍を支へることもある。英  
國の海軍をせしめたの支那の海軍を築し口の救をひら  
けしめ、下抹の國を築きしめし。この時々の  
言動も、新聞上にも外交上にも言ふべきであらう  
と人々が言ふ。此の言はさう、唯に言はるるを  
それにして、歴史の家の言はるる人の氏名を脱漏するは、  
あつても其の疎漏を言ふ所の氏名を脱漏するは、  
七一層大なる過をなさん、此の過は、海軍の大勢の力  
を、いゝともいふは、是のこゝろ、いゝことのこゝろ

○クリルツプ

ロシアヤイルトと向ひて世界の外交を裁かうと  
する大の関係をみし、この事又そのうち、  
め、又、  
歴史の家の言はるるを、いゝともいふは、  
あつても其の疎漏を言ふ所の氏名を脱漏するは、  
七一層大なる過をなさん、此の過は、海軍の大勢の力  
を、いゝともいふは、是のこゝろ、いゝことのこゝろ

○その関係

を、いゝともいふは、是のこゝろ、いゝことのこゝろ

てある而して流石と西の人の比自轉車の  
終るも此規則を遠くして衛完を極る極る  
してあるソウカ

○刺身

刺身を魚を厚くしてかまひるを極る切極  
の料理法にあり、勿論手洗子研りたるを矢  
張巧者の料理人のよりぬかざるもの、俣々  
石林志人の廻る録「流」を讀むに及ぶと支那  
ひも刺身を作ることを難くし、此時代のあ  
る後と曰く

往時南饌未用京師無有能斫斡者以為

宋書

珍味梅聖俞家有老婢獨能斡之歐陽文  
忠公劉原甫諸人每思食斡必提魚往思  
聖俞云

○竹林七賢の遺蹟

竹林七賢の遺蹟即ち竹林の在る地之今懐  
修武縣子也其地加号録流の古りてある

○滑稽の如執

俳諧の滑稽を理を旨とて脱して天真  
滑稽を極るを極るを極るを極るを極る  
歸月子出るを極るを極るを極るを極る

也。あひまはしに、あつちをさるるをいふことの  
為也。

稲妻 稲妻かうつをいふこと一たうけ

明月 明月かあつちをさるるをいふこと

行形 行形をいふこと一をいふこと

薯椒 人々武士にやれむも唐辛子

螻蛄 人々子るるいふこと一と螻蛄は

放屁虫 人のいふこと一上手を放屁虫

蛙 人々いふこと一上手に蛙をいふ

疥蛙 負けいふこと一疥蛙の意

天人の行をいふ

柳 けろりけろりと鳥と柳

立事 立ちあがり六に立ちあがる

日氷 日のあつちと氷のあつち

花 人々のいふこと一花のあつち

蛙 人のいふこと一蛙のあつち

虫 人のいふこと一虫のあつち

川中島 川中島の怪をいふこと一川中島

星合 星合のいふこと一星合

又よめあひまはしをいふこと一又よめ

鏡火燗よめをいふこと一鏡火燗よめ

○蜀山の戦世

蜀山のオコキをそと統を七試をく  
其印をすくしとてあふりきりて  
そのあゆまを、余も一巻を七巻  
ど、たのむをさし人の戦心さうとあふく

- 一 重なる目出がすき
- 一 一帯四を体北奴日本
- 一 二方の賭
- 一 唐錦並関取
- 一 頂を吞有
- 一 江戸花海志
- 一 壽塩南妹禮
- 一 練手偽無

○雅文

余の熟知のわづの二巻を誰れか余にたの漢

月接とそのそとつま海とをそとわづを越さむ  
言ふはよきとさういふ言ふを南をさむ月  
接とよまむいとそをさの竹枝を、さう月接  
前綴「月斜」とそよ句とある又おぼろくさ思  
をとそよ句をさあさ吉田梅樹とよまむ人  
とんと料記をさあさ青衫紅袖多自玩  
破倚舟江の破接」とつとれう言ふを多自  
玩とつとれう言ふをさあさ雅文のあさ

○淡舟軒

余のわづの旅舎をさあさ代橋のしはをさ  
あさ、余のわづのわづのわづのわづ



松も田舎も余の言のよき所ありしゆ言の氣  
大夫を深更におもひ余をこしと強をたれこ  
ともありしや、存の主人を御上能く雅を  
もとめし子ありし清水軒と地ありてあり  
るふと位水の端にもありしと極する所の余氣  
の雅ありあり、この錫屋を那をさるる  
と命じしと地ありあり、錫屋を、親し友人  
五郎の侍りあり

魚能に目雅難あり、屋は錫屋高姓錫

○不活死す

肝痛のるふとフジリスとさるる人死す

徳川家

2 和泥しと回く不活死す

○同様の又

雷山と出たの御人、一、従の御人と後に出天  
的取笑を擲やしし得や、一、差しありし、一、  
好風のまよふ、一、文書を極限悲を極  
極め、一、御人ありと、御人の苦さ、  
余の境界、一、誤同様の、  
つら〜思ふ御人ありと、  
こま〜思ふ御人ありと、  
あは〜思ふ御人ありと、  
あは〜思ふ御人ありと、

あは〜思ふ御人ありと、  
あは〜思ふ御人ありと、



七五とある所のいふは足利氏の時より義政の嗣胤  
能阿弥が大内氏京方とて書らるる所を作し  
且つ終つたものを世傳の秘書とある。これを  
馬の骨董社屋よりハシマシイ書物で、骨董  
の鑑定の標準としてこれを扱つたものとある  
それゆゑの足利能阿弥を一世を震盪せし物語  
よりぬきの義政の能く天下の名品を觀せし  
ゆへしなるハシマシイ三四、美、若、末、唐、明、代の  
珠玑を階級をわけて品騰志のつひあるは  
馬の鑑定の秘書といふを標準としてしるは強ち  
を記しきるは、これを標準としてしるは強ち

能阿弥

清しとあるは、ハシマシイの、能阿弥を  
アノボ、能阿弥とて天らの名品を悉く又と記し  
あるは、ハシマシイの、能阿弥を悉く又と記し  
ハシマシイの、能阿弥を悉く又と記し  
準と仰ぐは、能阿弥の書とあると  
ハシマシイの、能阿弥を悉く又と記し

○能阿弥——島田

此次日能阿弥の友人とて人の傳を傳ふる、余  
の病を、川馬高経の一本を贈らんとの書  
ハシマシイの、能阿弥を悉く又と記し

西南の役えん院幹事陸奥宗光百権太公  
記乃沼田守より陸奥を以て西方迄下を存け  
て旅团长とすは是下征軍に從ひんとす  
る乎沼田曰く余之を辭せんと陸奥三條  
實美の死して沼田の用もなきと後く三條曰  
く沼田守一より其の事ありて款を西郷に  
通下密に子機を飛して同志を募りてあり  
しとてこれ極文既より余の千子入れんと陸  
奥之れを以て愕然たりと高んが如くん  
亦僧極文より其の事と義勇兵を募りて  
既去ちりて沼田の挙もとせり今も在り

陸奥宗光

三條の死より多し探偵の誤らんこと  
らんこと

熱河の陸奥とんてんる島田沼南ととも  
めとる能く沼南と沼田の事と端は流流  
の死を叙して而して其の仕女を沼田の  
義勇兵募りての流流を聞てとて

分防より橋を檢る所を録して亦其沼  
田の死を叙して其の事と加る島  
田も沼田の死を叙して其の事と流流を  
叙して其の島田の死を叙して其の事と

きよ辟あしふの故あるを之をさふがより能く  
美窮しと退けりと島ゆるともそらぬめら  
くをんはあふが

○月の瀬梅

月の瀬梅と拙書の記文をんて居るそらふは  
えんも俗すもさるる節を感く勝色とさうし  
北地をこゝろふもあふもさうもそらふは  
人の津村定北地とさうし梅梅り記の若  
るさうもさうもあふもさうもさうも  
るさうもさうもあふもさうもさうも  
るさうもさうもあふもさうもさうも

言和元年板田言中言若手痛子とそら  
中子記もあふもさうもさうもさうも  
北地を記せし方とそらふもさうも  
の記りやうもさうも

○雅文

左の雅文と大和申建梅のこのせし  
画を親もさうし、倭文とそらふも  
て余いさうもさうも

山吹

あふも井岡を咲き埋めさう山吹、花もい  
お、蒼もいはい、夜のあふもさうも

美しけれぬ女の事を釣瓶と云ふは、若衆の  
の玉を三ツ四ツ破けて洗い上げたる芥の上  
の毒なり

後巻

侍こころ人さへいふ守まつひは物なきに若衆な  
けもさあめお、雲雀うつくすも七つあす油のき  
そのあき、うつくすをたいよらせし舟  
を洗い又身をまつ。

○毒十字社

分るる今世に、社会の儀をいひ、若衆一たあ

毒十字社の在りし、その毒をいひ、現在正社  
の敷七十四万二千ある。天よりて賛助者物お  
る是れおを係弄すれば総計七十二万一千  
二百七十七人ある之を物四百万の油を人の  
船よりゆすめば六十人強中一人をゆすめ  
合るとする又一年ちの醜を総計を二万  
七萬、子ある五十四箇うきさる由其とさすと  
そのいし、ドウをゆすめしよしとゆふ(おま)

○紙幣の車輪

西海をよむ流車の車輪を改らし、ろしと上



ろは思ふて天井もせせ出づる。こはは果の可  
も、いよしくふき宿をいよしくすまふ蓋さし  
こんよき親をよきと、ひとをいふ交のよき何れ  
あめたるいよきとさしとさし

○八幡の八幡あま

八幡の地もあまさる行徳を信ずこん八幡あま  
とまふかう(一説)七と八幡純のあまし、あまふ人をも  
の止へ入らうと不出候を信ず人をおいさふあまふ  
やとまふあまのあま

○霞佛

僕もなまらの大佛、ついでに耳取佛説を云

東林風雲

まゝ一人のあま、木道のままの由、あまのまを信ず、  
火災の難を以首をまふ難まかぢせし、まの  
まのままかあま、まのまま、まのまま、  
地まのままも出づる、又像の形持の釣合の  
ことまも霞佛、まのまま、まのまま、  
はあま、あま、あま、あま、あま、あま、  
あま、あま、あま、あま、あま、あま、

○鶴倉の大佛

今も霞佛説を説、地以像、鶴倉大佛在中  
一節を説、大佛をんてあま、地佛之心あま、  
まを信ず、まのまま、あま、あま、あま、



浦のそえの心あるその世のあはれ、  
果すといふこと

あまのこ南部の佛のまゝのまゝに  
しとてんしに流石の新朝も  
を興しぬるに子國のまゝに  
ては人の心もけつと  
しとてんしに流石の新朝も  
を興しぬるに子國のまゝに  
ては人の心もけつと  
しとてんしに流石の新朝も  
を興しぬるに子國のまゝに  
ては人の心もけつと

一年と経て寛政二年の秋  
一とてんしに流石の新朝も  
を興しぬるに子國のまゝに  
ては人の心もけつと  
しとてんしに流石の新朝も  
を興しぬるに子國のまゝに  
ては人の心もけつと

鐘の音も風をよめる  
鐘の音も風をよめる  
鐘の音も風をよめる  
鐘の音も風をよめる

再びしを由井信風海島ちの坊どひてふのせい  
 歎

○ヒマラヤ

仰せの高山にマラヤと名旅と名義と名の耳  
 なる清浄を尊ぶ佛あり圓とありソウふえり

○湯殿山

湯殿山を自然の沸湯を神体とする尊厳  
 の大いそある二名恋山と云ふうゝ何なるやんし  
 きをを

○月の大小

月の大小をいへるは西洋にたのめきかた

林屋

はすをいふたごのあはれに愛しをたな  
 ぶゆの大の眼も月をこゝへ金さつめたの二句  
 を口弾けんたちをいふ

Thirty days have September, June & Nov.

井上田三は漢文的一と云ふをまてなす

孝切忠信を漢語御孔之教也

偏りなき文字を何れも大方いへ物あるを治ふか  
 の月也

○お梅書

清朝小説の白眉と云ふ、お梅書あり、お梅書  
 と書雪芹の撰りし一石頭地と云ふ通へ

二十五回しゆ人物をすすまの男はる三十五人女は二万十三  
人のまきうらひ結構おもしろ也或るまよの北吉満満  
人を刺すのまをよまると、こゝをいへ満人の巨族切達  
しと之れを燃焚せしむる数回、おれをも焼くを燃焚ば  
随つて出づ、此にうの禍の甚あま及らんことを雷を  
満人称賛をまふ眼ををし、兒女英雄傳を著りし  
満人のまをよまるとお梅書しの甚あまを救ふとて  
しとのあま、考傳七あめり教の文章をて大い  
行いしとまをもてお梅書しの牛を阻む能  
りしと此書のことをも風魔せしことおれんし  
お梅書しの行いし其に上海のまをよまるとお梅

お梅の危し随つてまをよまるとお梅書しの  
とりの活すまをよまるとお梅書し

一 後お梅書し 一 随お梅書し 一 お梅書し

一 お梅書し 一 お梅書し 一 お梅書し

又青梅書しとまをよまるとお梅書しの甚あま  
原す

○平賀源内のあま

平賀源内のと潜岐の人とてししとのまを潜岐  
のいつこの人とのまをししとのまを潜岐  
寄り敵ませしとあまし子此に病やのつん  
く子と保天胞の潜岐化りて後まを行くま  
潜岐化りて後まを行くま

潜岐化りて後まを行くま

志が浦のくじり子、あつらひく平賀お屯の  
記号とゆきま、おまねものお子さきくまし  
くましんあまをふあは、おぼのあまうげ  
田子あ子うつく心地をうま

志を二世の善の傑終行平賀浦内の生んし  
地々、町の西端、間に居る板塀、く桂松  
の枝々、かざり、なま、古風ふた、おぼ子  
作、暖簾の入口内、おぼ子持ニツ、ニツ、あま  
鋪の框、近く、うま、角火鉢、おぼん、帳場  
の傍、と、大幡帳、中の間、と、鋪、と、一、あ、あ  
大黒ね、と、昨、高平、賀、能、あ、と、持、板

の標、打ち、と、大、流、布、を、お、お、一、電、氣、機、械、を  
作、を、鑑、物、を、お、お、一、本、を、を、研、文、一、海、お、お、  
を、計、畫、し、お、お、一、禱、念、機、才、を、若、一、と、潮、世、置  
俗、の、ま、を、押、お、一、神、室、夫、一、海、と、海、珍、珍、作、者  
の、名、を、さ、く、東、一、と、お、お、一、お、お、一、と、海、内、の  
妹、婿、権、方、夫、家、系、を、お、お、一、お、お、海、内、の、遺、伝  
、お、お、一、お、お、の、名、を、お、お、一、お、お、と、お、お、一、高、き  
お、お、の、間、を、う、ま

天、隨、を、遺、物、の、二、三、を、お、一、お、お、一、お、お、  
中、と、天、孫、板、の、一、軸、あ、お、一、お、お、  
海、内、十、歲、の、時、畫、き、お、お、一、お、お、一、お、お、  
お、お、の、心



九出は元即ち一の一七八個あるが、日塔の塔  
 階を事と、既しては数千年の多きまの今んかに  
 あらぬしうも、もとむ書の工夫者なるかあ  
 うくおあ氣うも止めう土塊と一つうんを  
 りたお、ぬの人の種を胡物も剥けず、彩も七  
 色も七色あちう所う、世ある所を、の松  
 つて既界人の元は、向うの北はあううく  
 有る此人に、祀るに、この書も、昔の  
 事、あうも、ぬの、あうも、この書も、  
 あうも、ぬの、あうも、ぬの、あうも、ぬの、  
 の人形を、拾ひ、あうも、ぬの、あうも、ぬの、

蘇州原製

ぶ出て一個の五の後に、言は、は、あうも  
 記述、ぬの、あうも、ぬの、あうも、ぬの、  
 心も、あうも、ぬの、あうも、ぬの、あうも、  
 ぬの、あうも、ぬの、あうも、ぬの、あうも、  
 と、あうも、ぬの、あうも、ぬの、あうも、  
 書を、あうも、ぬの、あうも、ぬの、あうも、  
 ぬの、あうも、ぬの、あうも、ぬの、あうも、  
 文、あうも、ぬの、あうも、ぬの、あうも、  
 ぬの、あうも、ぬの、あうも、ぬの、あうも、  
 つ、あうも、ぬの、あうも、ぬの、あうも、  
 二、あうも、ぬの、あうも、ぬの、あうも、









曰く此人、人おとろし〜か此人こそと云く〜と  
味あ〜と云く〜と

○伊色の刑

伊色を主 初妻のこを 別法刑の新決をまけ  
し〜んをさきき 勢あし 結罪の 刑心 結さるの  
先ん する 而して 是の 刑刑を 多く 刑 結刑  
こゝろ 次々 死刑を 懸 弘人 と 以て 是を する〜と 伊  
色より 結罪の 白法を ぬき すると 多く 結 結の 結 結  
眼七 悔も する、伊色を 果して 是の 結 結の  
宜先と 受け する

○肉蒲團

肉蒲團の甚きやを 死ぬる 或を 思ふ 李三 妻  
中身の 心さ〜と

○関西の二か説

此の 見え する 説を 京都 なる〜と 関字  
ある とい〜と 説 果の 心〜と 家、を 説 集に  
ち 改 昔の 説 考を (ある 由) なる 事 せし 中 村 喜  
西の 心 (心) 罪 (心) ち 改 初 子 連 載  
〜 荻 池 幽 芳 心 あり する 高 敷 の 信 仰 と 人 情  
の 衝 突 家 庭 と 社 会 の 衝 突 を 沈 痛 極 極 極 極  
〜 とい 〇 罪 心 あり する 事 を くり くり と あり する 事  
を 新 しく け する 事 あり する 事 の 眼 力 を 汚 し 心



つと北条の病であると思つて甲斐丹を二冊おたの  
す又五冊丹をかうつた

○二年有半におつた余の日記

燈をくまをくま味ちるをきよ北条症におしつたも  
多く且つ深き回復の漢を深くしつた余の病は  
余を治すに大隈仙師の北条又治すことあるを  
北条の著せしるを<sup>十</sup>北条の病を治すことある  
(三人経論問答) 北条の病を治すことある  
とあるが回復の漢を能くするを<sup>〇</sup>病の境界  
較<sup>〇</sup>じ<sup>〇</sup>ありある、  
証を二三節をお録せん。

(前) 喉の腫れ水気を含んで大いなる呼吸の  
促進を促し半已あるを眠らすこと能く<sup>〇</sup>中  
之を防ぐこと氣の<sup>〇</sup>切開の一法あるを<sup>〇</sup>せ  
又易き手術<sup>〇</sup>を<sup>〇</sup>切開の一年<sup>〇</sup>と<sup>〇</sup>を<sup>〇</sup>と<sup>〇</sup>を<sup>〇</sup>  
と<sup>〇</sup>を<sup>〇</sup>挿入し<sup>〇</sup>を<sup>〇</sup>也<sup>〇</sup>

此<sup>〇</sup>北<sup>〇</sup>条<sup>〇</sup>の<sup>〇</sup>手<sup>〇</sup>術<sup>〇</sup>を<sup>〇</sup>而<sup>〇</sup>し<sup>〇</sup>は<sup>〇</sup>本<sup>〇</sup>根<sup>〇</sup>本<sup>〇</sup>的<sup>〇</sup>治  
療<sup>〇</sup>の<sup>〇</sup>一<sup>〇</sup>法<sup>〇</sup>と<sup>〇</sup>し<sup>〇</sup>て<sup>〇</sup>を<sup>〇</sup>治<sup>〇</sup>す<sup>〇</sup>は<sup>〇</sup>一<sup>〇</sup>室  
息<sup>〇</sup>を<sup>〇</sup>治<sup>〇</sup>す<sup>〇</sup>は<sup>〇</sup>一<sup>〇</sup>室<sup>〇</sup>

氣<sup>〇</sup>を<sup>〇</sup>切<sup>〇</sup>開<sup>〇</sup>し<sup>〇</sup>て<sup>〇</sup>を<sup>〇</sup>治<sup>〇</sup>す<sup>〇</sup>は<sup>〇</sup>一<sup>〇</sup>室<sup>〇</sup>  
輔<sup>〇</sup>助<sup>〇</sup>し<sup>〇</sup>て<sup>〇</sup>手<sup>〇</sup>術<sup>〇</sup>な<sup>〇</sup>ら<sup>〇</sup>ぬ<sup>〇</sup>は<sup>〇</sup>女<sup>〇</sup>を<sup>〇</sup>治<sup>〇</sup>す<sup>〇</sup>は<sup>〇</sup>一<sup>〇</sup>室<sup>〇</sup>  
余<sup>〇</sup>も<sup>〇</sup>あ<sup>〇</sup>る<sup>〇</sup>は<sup>〇</sup>一<sup>〇</sup>室<sup>〇</sup>を<sup>〇</sup>治<sup>〇</sup>す<sup>〇</sup>は<sup>〇</sup>一<sup>〇</sup>室<sup>〇</sup>

一之字人多くは癰腫をたけり氣を交けり何れ  
をこそ病をせり或るは根を切りて死す  
と書せむと云ふ病を根を切りて死す  
也所謂一年を喰ひ余と妻と之を喰ひて死す  
子生すや二児の養ふ者はお書りて  
父上御病を治す快後云々と此家父死す余に於  
てストリツリ御病を治す夫を治す事自  
治す事云々の事人にも亦云ふ事あり或は  
是れ病も余の病を治す事ありと云ふ事  
と云ふ事云々の事根を切りて死す事あり  
ぬと祝したる事同一の事あり

神様家

堺市海邊の二節の事

余了妻と但し一歩して海江の事云々天雨を借し  
黒雲四方を蔽ひ波浪を拍り靴靴の聲人を  
一と云ふ事云々の事或は病を治す事あり  
余既し不治の疾を治す事あり所謂一年を喰ひて死す  
けと云ふ事あり余の病を治す事あり所謂一年を喰ひて死す  
七是れ固りと治す事あり所謂一年を喰ひて死す  
を治す事あり余の病を治す事あり所謂一年を喰ひて死す  
通債云々の事病を治す事あり所謂一年を喰ひて死す  
堪らぬ事あり余の病を治す事あり所謂一年を喰ひて死す  
四十餘余死したる後此再婚の事あり

ず余を信ず水を投じしをさるるの仰ふ如く  
牛の肉とある人哄笑し途や南瓜一粒と杏果一粒  
を食ふと云ふゆゑのゆゑに九の

誰れう此一節を讀みて 夢をさるるもの

余うふれに在るや其ま留守将と大捨書後一  
日二日も陽てゐあある、而して信まの事を催せ  
し事一若くは執達吏の事を或命せし事  
と相せざる莫し是を則ち獨り余うさるる程  
不況者をさけし之をさるる余うさるる  
亦惡性の疾をさけそのを謂ののき、耶此  
外患内難なる方こそ余う其學者の意を借引

地獄集

るるをさるる其の事、于其際余う味方  
たる者、唯余の事を余う兒子と余の事と  
あるる而して余の程は是れを陰謀して  
後世に傳へ給ふを要せり

漱死の後に在るし通債の督促をさる、これ又人  
生換ふの一、如くも通債の督促、暇と思ひ難  
きものあり、唯死しを要せを言する、財  
なき、漱死病人の方こそ思ひ難きもの、思ひ  
こゝろ、脇九回をわはる、余う一たび回  
後を推する、一たびこれかき  
一年あつたの草日々世流ある国と云ふもの、而

著者其人物を自ら一風俗を品騰し、政治を論議  
 し、婦奴を叙述するや、冷然たる平妥なるに、著者  
 實に其の才多しと云ふべし。而して其精華中庸を失て、  
 彼の古社を固守するも、その孔の遺を失て、  
 中二統の彼の如く、近代非凡人世人を尊ぶ。

余近代の於て非凡人を精選して三十八人を以て  
 曰く、藤田東湖 梅人 紅梅 陳本龍馬  
 柳橋(汝の柳橋) 竹本喜之 橋本左内  
 中江國平 大久保利通 杵谷六郎  
 北の禁三郎 柳川七郎 陣幕久吉  
 梅谷松平 隈山久吉 岡朝

四書

伯田 西山隆生 祖楓 林中 福原  
 又藤原 柳橋左夫 大隈太夫  
 市川圓沙 村松香雪 及九女八  
 星亨 大村益信 雨宮家信  
 大川市兵衛

然る而して伊藤山翁、板垣退蔵を以て、  
 而して其の接して、若くは彼等、彼等、  
 人名解き、四半頁をも、  
 以て此民の為人を、  
 此の廿一人の中、  
 是れ也、近代非凡人の一人、  
 是れ也、満る、人

○クレラソリート

クレラソリートは、肺病を治すに唯一の薬である(今までの間に)  
 どの薬も(コレラ)の薬は、治すに防衛(防衛)の薬(コレラ)  
 といふ(コレラ)の薬は、治すに防衛(防衛)の薬(コレラ)  
 ソリートは、治すに防衛(防衛)の薬(コレラ)

○肺病と松林

肺病患者を治すに、松とせる。松とせるに、松とせるに、松  
 林の子を治すに、松とせる。松とせるに、松とせるに、松  
 シンとせる。松とせるに、松とせるに、松とせるに、松  
 シンとせる

○トリンの関

東京

未開荒者の言、ウアンジー、ヒルトンの松林は、  
 トリンの言、ウアンジー、ヒルトンの松林は、  
 トリンの言、ウアンジー、ヒルトンの松林は、  
 トリンの言、ウアンジー、ヒルトンの松林は、  
 トリンの言、ウアンジー、ヒルトンの松林は、  
 トリンの言、ウアンジー、ヒルトンの松林は、  
 トリンの言、ウアンジー、ヒルトンの松林は、  
 トリンの言、ウアンジー、ヒルトンの松林は、  
 トリンの言、ウアンジー、ヒルトンの松林は、  
 トリンの言、ウアンジー、ヒルトンの松林は、

○ロと



世の人心四千三百人として一人の口徑二寸と體量  
してその乗すのみにして十ニ一と云ふ口徑一寸と  
又して三寸三十餘を云ふよりその地幅を云ふこと  
度々して其の倍の口徑を云ふこと果して此の六  
四を果せば其の口徑の動かしき花を云ふ  
井田の口の既述而云し

○中牧方士

世の人心四千三百人として一人の口徑二寸と體量  
してその乗すのみにして十ニ一と云ふ口徑一寸と  
又して三寸三十餘を云ふよりその地幅を云ふこと  
度々して其の倍の口徑を云ふこと果して此の六  
四を果せば其の口徑の動かしき花を云ふ  
井田の口の既述而云し

東林叢書

世の人心四千三百人として一人の口徑二寸と體量  
してその乗すのみにして十ニ一と云ふ口徑一寸と  
又して三寸三十餘を云ふよりその地幅を云ふこと  
度々して其の倍の口徑を云ふこと果して此の六  
四を果せば其の口徑の動かしき花を云ふ  
井田の口の既述而云し

謂ふ義禱り痛くもよみそしと保徳のそすを  
うらむ引決して死を改て子ぬらふと自らきり  
其後杉原が放たれ而して方士禱るをくも物  
あふ

余のよあの文おの自<sup>ふ</sup>又誠石と国士の入城を  
の取らよもまゝさへしとわあの家を女を誠  
死の事とをるく自<sup>ふ</sup>尺六保るま河とを  
すこゝの移る死をるるるとまよ川河ゆをく  
ゆ即ち移すは後と痛くもよ余のよあは  
士の画お救とす其後よあを痛くもるる  
為一悔とをたす

A blank ledger page with a blue border and 12 vertical columns. The columns are of varying widths, with the outermost columns being wider than the inner ones. There are small blue triangular marks on the left edge of the page.

東  
洋  
製

A blank ledger page with a blue border and 12 vertical columns. The columns are of varying widths, with the outermost columns being wider than the inner ones. There are small blue triangular marks on the right edge of the page.

以下全て

白紙

明正  
甲子  
九

月下浣

福令  
三橋  
馬

長  
初  
安